
聖杯を抱く騎士《シュヴァリエ》 ~ Impossible Love ~

宝来りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯を抱く騎士^{シユウアリヒ} (Impossible Love)

【Nコード】

N9734X

【作者名】

宝来りよう

【あらすじ】

紫堂緋奈^{しとうあかな}一六歳は、ジャンヌ・ダルクの末裔である。

修学旅行中、家族を原初の闇である精神生命体“ゆらぎ”に殺され、わけのわからぬまま復讐に乗り出すのだが。

相棒は、ジャンヌの元片腕の騎士、ラ・イールことエティエンヌ。彼は、絶世の美貌の持ち主だが、非常に怒りっぽく説教體質。相性最悪の二人は、喧嘩しながらもなんとか“ゆらぎ”退治をはじめ。

このお話は、一人の少女の成長を描いています。(恋愛もあり)

自己中心的な少女が、さまざまな戦いを通じて人を守るとはどういうことなのかを考えていくというストーリー。

プロローグ（前書き）

はじめまして、宝來りようと申します。

拙い作品ではありますが、主人公とともに作者も成長していったらと思っています。

プロローグ

> i33709—4272<

わたしは、彼を愛する。

たとえ、ヘロディアスの娘サロメのように、愛しい男の首しか手に入らないとしても。ただ一度、その冷たい口唇に口づけたいがために、わたしは、彼を愛する。

一四三二年 五月三〇日。

北フランスのルーアン、ヴェー・マルシエ広場。

高くしつえられた火刑台に括りつけられた少女の名は、「ジャンヌ」。彼女は、異端の罪により裁かれようとしていた。

(ラ・イール、こんなところまで)

ジャンヌは、群衆の中にかつての右腕であり、恋人でもあった男を見いだした。オルレアンからルーアンまでの数百キロ、どれほどの勢いで駆けてきたのか、彼の白金の髪は泥にまみれ、騎士服は巡礼者のようにずたぼろだった。

数十メートルの距離を隔てて二人が見つめあう。まなかに恋人の最後の姿を移しこむがごとく。

(ジャンヌ……。ジャンヌ・ラ・ピュセル。

わたしは貴女をお救いすることが出来なかった。

だから……。こんなわたしにできることといえば、貴女の最期を

この目に焼き付けることくらいです。

愛しています。わたしは未来永劫、貴女だけを愛し続けるでしょう。

ジャンヌは、ラ・イールの言葉が聞こえたかのようにつつすら微笑むと、天を仰いだ。

『イエス様……』

彼女は夢でも見るようにそう呟くと、二度と瞼を開かなかった。

ふたりの刑事が幾重にも積まれた柴に火をつける。それは瞬く間に紅蓮の焰ほむらとなって、小さな少女の身体を舐めていく。

炎に抱かれた救世の乙女は、最後の瞬間ときに何を想ったのだろう。己の短い人生か、それとも恋人との思い出だろうか。

だが、たとえ彼女の目交まなかに何が浮かんだにせよ、それをけして斟酌してはならない。

人がひとりで生まれ、ひとりで死んでいくことが神代からの約束だとすれば、死に臨んだ想いは、人知れず天園まで持っていくべきものなのだから。

ここに、救世の乙女の火刑は終わり、ジャンヌの灰はセーヌ河に流された。それは、魔女の甦りを封じるための仕儀である。

だが、火刑にあったものはほんとうに甦らないのであろうか。『いや、違う』とラ・イールは思った。

重い代償を支払わされたジャンヌこそ、来世は、幸せにならなくてはならない。たとえ、その隣に自分の姿がないとしても。

ラ・イールはひざまずくと、ジャンヌの未来永劫の幸福を神に祈ったのだった。

【追記】 後に、聖女の列に加えられる『ジャンヌ・ダルク』だが、彼女の異端の罪は、現在も取り消されてはいない。

弓張り月。

その夜空に浮かぶ宝剣を焦がれるほどに欲しかった。

だが、月の宝剣は神々のもの、人の手には余る剣なのだ。

それに、欲した力は、今この腕のなかにある。

「何を見ているのですか？ 風邪をひきますよ」

耳障りのいい声がすぐ後ろからする。あたしは、その声に振り返らなかつた。今夜の月があまりにもきれいだつたから。

「月をね、見ていたんだ」

小さなアパートの窓いっぱい三日月が映っている。あたしは、窓辺に座り、時を忘れたようにみていた。

「思い出していたのですね」

「うん」

あたしがようやく振り返ると、中世の騎士衣裳を纏った青年が真っ青な瞳を翳らせながらこつちを見ていた。

彼の名は、『エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール』

この舌を噛みそうな名前を持つ青年は、もちろん人間ではない。

いや、元人間といったところだろうか。本人は守護霊のようなものだといっていたから。

エティエンヌは、あたしの母が遺したトランプに付いてきたオプシオンで、『導きの騎士』というものらしかった。いくら銀で象嵌されたケースに入っているとはいえ、古くてきつちやないトランプのオプシオンとしては豪華すぎるかもしれない。何せエティエンヌは騎士様で、女の子が求める王子様の条件をすべて満たしているの

だから。

月光を紡いで創ったような白金の髪に、真昼の青空の瞳。まるで、昼と夜の具現といったふう。絶世の美貌を持つ彼に見とれない女など、この世に一人としていないだろう。

けれど、あたしにとってエティエンヌは、ただの相棒。もっとうなら、利用すべき相手だ。

「エティエンヌ、行くよ！」

あたしは、もう一度名残惜しそうに、弦月に目をやると立ち上がった。

すると、月光をつけて手のひらの中にサクセサー継承者のしるし徴が浮かび上がる。

あたしは、それをぎゅっと握り締めた。この運命を与えたすべてのものに復讐するために……。

『KEEP OUT』

黄色いテープの内側

あたしはまだ煙が燻ぶっている焼け跡に“それ”を見つけた。腰をかがめて“それ”を拾うと、手のひらでぐしゃぐしゃにする。芳香と鉄さびの匂いが鼻をついたが構わなかった。足元に叩きつけ、思いつきり足で踏みじじる。

“それ”の花言葉は不可能。

花に二重の意味を持たせるなんてやってくれる。

ここに“それ”を置くことは、人間には不可能。そして、おまえが家族の敵を討つことは不可能。奴らは『青い薔薇』にそう言わせたいのだ。

『継承者………』

なによ、あたしは眠いのよ。

『継承者………』

『うるさい！さっき寝たばかりなんだから起こさないでよ』

『継承者………』

あまりにもしつこい声にあたしは、仕方なく瞼を開いた。

ありつ………？

なによ、ここは………？

あたしは、ふかふかのベッドから、黒々とした深い闇に墮とされ
ていた。

しかも、目の前にはブラックホールのような大きな渦がある。ど
うやら、この渦が、あたしをたたき起こしてくれた張本人らしい。

『あのさ、継承者だかなんだかしんないけど、用があるなら早く言
つてくれない。明日から修学旅行だし、今夜は、早めに寝たいのよ』

あたしは、わざとらしくあくびをして、寝起きの不機嫌さを少し
も隠さなかった。

『んぐるんぐるんぐるんぐるん………！』

ブラックホールは、あたしの生意気な態度に怒ったのか、突然凄
まじい回転を始め、大きく唸り声をあげた。

それでも、これを夢だと思っていた。自分が、紫堂緋奈しゅうあかなが、こんな
想像力を持っているはずなのに。

『ふふ、お前はただの人間だな。

………の血など少しも感じられぬ。

だが、人間の世界には、“念には念を入れる”という言葉がある』

苦笑交じりの、老人が子供の我がままを聞き流すようなほんの軽い口調だった。

けれど、ブラックホールが、そのセリフを言い終えるか終えないかの刹那、殺気のもった恐ろしい視線を体中に感じた。底知れぬ恐怖が指先からあたしを凍り付かせていく。

だが、この恐怖は、そんじょそこらの恐怖とは違う種類のものだ。例えば、死ぬほど怖いホラー映画とか、学校帰りに後をつけてくる痴漢とかとは。たぶんもつと本能的な闇を恐れる恐怖に似ていた。

『なによ、ただの人間で何が悪いっていうのよ！』

それでもあたしはせいっぱいの虚勢を張った。人を呼びつけておいて、勝手なことを言うヤツに弱みなんか絶対見せたくなかったから。

けれど、いつまでたっても、お化けからの返事は返らない。それどころか、急激に足元が崩れる感覚がした。

『ちよ……ちよつとっ。……い……いやあああつ……』

あたしは蟻地獄に落ちる蟻のように、バタバタとあがきながら、奈落の底へと落ちていった。

ブラックホールのお化けは腹の立つことに、暴力的にあたしを眠りの奔流へと戻してくれたのだった。

「おはよう……」

あたしは、寝不足で痛む頭をかかえながら階段を下りると、ダイニングテーブルの自分の席についた。ダイニングには、いつもどおりの朝があつて、あたしをほっとさせた。

新婚さんのようにいちやつくスーツ姿の父と母。皿まで食べそうな勢いで、朝食を取る生意気な弟の聖樹。

動物園の熊みたいな父さんが、乗せてくれる端の焦げた目玉焼きは、あたし好みの半熟で、今日もこれからと同じ日が続くことを疑わせない。

悪夢だと思つてしまえばいい。そうよ、あれは絶対に悪夢。あたしは、自分に必死に言い聞かせた。

「なんだ、緋奈。おまえが食欲ないなんてめずらしいな」

目玉焼きをフォークの先でつついていたあたしに、父さんが心配そうにいった。

「ちよつと眠れなかつただけだよ」

あたしは顔をあげると、父さんを安心させるために少しだけ笑つた。

もし、父さんに夢の話をしたら、『ただの夢だよ』といつて、いつものように豪快に笑い飛ばしてくれるだろう。

でも、あたしは、ただの夢だと思ふことが出来なかつた。何故と問われれば、なんとなくという返事しか出来ないけれど。

「姉ちゃん、修学旅行が楽しみで眠れなかつたんだろ？ガキみたいだかな」

分厚い食パンにバターを塗りながら茶化してくるのは、弟の聖樹。

「あんたつてマジ憎たらしいわね」

あたしは、隣に座っている聖樹の頭をげんこつでぐりぐりすると、ヤツがバターを塗り終えたばかりのトーストをひよいっと取り上げてやった。

「なにすんだよ〜！」

必死にトーストを取り返そうとしている聖樹の頭をなおもテーブルに押しつけてやってからダメ押しとばかりにパンにかじりついて

やる。

すると聖樹は、テーブルのうえからくぐもった声で、

「そんなことばっかりしてるからひとりも彼氏できないんだよ！」
と言ってきやがった。

「聖樹くん、子供のあんたにはあたしのよさはわからないよねえ。
まだまだお尻の青いお子ちゃまだもんねえ」

あたしは、聖樹に何度も子供と繰り返し返してやった。中坊のくせに
年上の彼女と付き合っているコイツが子供といわれるのを一番嫌う
の知っていたから。

案の定、聖樹は、顔を赤くして怒った。

「お子ちゃまっつて何度も言うな！」

姉ちゃんさ、ほんとは俺がモテるからやつかんでいるんじゃない
の？」

聖樹はそういうと、勝ち誇ったようにふふんと鼻で笑った。

(こいつめ、本気で可愛くない。今日こそ姉に対する礼儀を教えて
やるうじゃないの)

あたしは、バシッとテーブルを叩くと、聖樹のシャツの襟を両手
で掴みあげた。

「うるさい！あんた達のせいで大樹のいれたコーヒーがまずくなる
じゃないの」

母さんは、白磁のコーヒーカップをソーサーに置きながら、あたし
たちをギロリとにらんだ。

(うっ、怖っ！)

あたしは、いやあたしと聖樹は、誰よりも母親が苦手である。

何故かといえば、彼女のきつい三白眼を向けられると、何もして
いなくても平謝りしてしまいたくなるからだ。

おそらく、幼児期にトラウマになることがあったのだろうが、そ
れをほじくり返すつもりなどあたしにも聖樹にもこれっぽっちもな
い。

「母さん、ごめんなさい」

あたしたちは、揃ってクソがつくくらい丁寧に謝ると、お互いそつぽを向きあいながら朝食を続けた。

その時ちようど、キッチンから出てきた父さんが時計を指差すといつた。

「緋奈、もう八時だぞ！冴ちゃんが待つてるんじゃないか？」

「えっ、もうそんな時間？」

あたしは、聖樹から奪い取った残りのトーストを口の中に放り込むと、あわてて制服のジャケットをつかんだ。

「聖樹く〜ん。」

愛しの冴子に何かお伝えしましょうか？」

聖樹をからかいながら、すばやくジャケットに袖を通す。

こいつの彼女とは腹立たしいことにあたしの親友で、ふたりは去年の暮れから付き合い始めていた。もちろん、聖樹の強力な押しによつて。

「毎日、電話するからつて伝えて！」

「……………」

冷やかしたつもりだったあたしは、平然とノ口けられ、わが弟を宇宙人でも見るように見つめてしまった。

「緋奈。本当に遅刻するぞ！」

父さんにもう一度せきたてられて、あたしは旅行バックを手に玄関へ急いだ。

「いつてきます！」

父さんに手を振り、あたしは、冴子と待ち合わせたセブンへ全力疾走した。時間にきっちりしている冴子は、イライラしながら待っているだろう。

急がなきゃ。

それなのに、あたしの足は何故か歩みを止めてしまった。

振り向いた先には五年前、両親が建ててくれた赤い屋根の家。犬

を飼おうという約束はのびのびになったままだけれど。それでも、大切な、たつたひとつの我が家。

この時のあたしは、悪夢を不安がりながらも、まさか家族に『ゆらぎ』の手が伸びるとは考えてもいなかった。

もちろん、これが我が家を見る最後になるなど頭の片隅にもない。あたしにとって日常とは、退屈に平和に変わりなく流れていくものだったから。

九月の雨。

あたしは、今だかつてこれほど雨を冷たいと思ったことはない。肩を抱いて身体をぶるつと震わせる。まるで氷雨のごとく、体の芯まで凍りつかせるようだ。

「いやあああつ………！」
力をなくした腕から、バックが水溜りに落ちる。それさえも気づかない。目のまえの惨劇ゆえに………。

古の都、京都&奈良。

四泊五日の修学旅行から帰ってきたあたしが見たのは、すっかり焼け落ちた我が家と、真つ黒焦げになった父母の姿だった。

もし、強風による新幹線の遅れがなかったら、あたしも両親と一緒に灰になることが出来ただろう。

警官の制止を振り切って、焼け跡に入ったあたしは目を疑った。かつて、リビングだった場所に一輪の青い薔薇。全てが死に絶えた奥津城おくつぎに瑞々しいそれは、かえって禍々しくて。

「まさか………」
思わず滑り出た言葉が犯人を教える。

『念には念を入れる』

もしかしたらヤツは、あたしを殺すために火事を起こしたのではないか。

だが、新幹線の遅れのせいで、あたしというターゲットを殺し損ねてしまった。それが悔しくてヤツは、嫌味な挑戦状を叩きつけてきたではないだろうか。青薔薇の花言葉まで使って。

ただ、ひとつだけ不可解なことがある。どんなに手を尽くしても、聖樹が見つからなかったことだ。父母はお互いを庇いあうように折り重なって、焼け死んでいたというのに。

いつもの帰宅時間、遺留品などから聖樹は家にいたはずで。もし、出かけていたとしてもすぐに家に戻ったろう。ラブラブな彼女の帰りをあれほど待ちわびていたのだから。

けれど、一週間がたっても、聖樹があたしのもとに帰ることはなかった。

プロローグ（後書き）

感想などいただけると飛び上がって喜びます

第一章 ファティマの預言書（前書き）

トランプの絵札は、13がキング、12がクイーン、そして11《ジャック》は・・・なんと騎士のことなのです。

そして絵札の各マーク（たとえば、ハートの11のように）にはモデルがあります。この小説のエティエンヌことラ・イールは、ハートのジャックのモデルと言われています。

聖杯を抱くシュヴァリエ、豆知識でした。

第一章 ファティマの預言書

？

東京都中央区、京橋二丁目。

東京駅から歩いて十分ほどにある、時代に取り残されたような古いビル。

五階に上がるまでにたつぷり三十秒はかかるだろうエレベーターに乗り、突き当たりのドアを開けると、ビルと同じ年月を生きてきたと思われる男があたしを待っていた。

「紫堂黎子様が遺されたのはこれです。」

小さな、中国人のコックですらダシをとるのを嫌がりそうな、シワだらけの手が差し出した箱をあたしは、しぶしぶ受け取った。

このビルの主、神原という老人は、母が雇った弁護士だった。

彼と初めて会ったのは父母の通夜の晩。

もし、この弁護士が弱々しい老人でなければ、あたしは、彼の言葉を聞き入れることはなかったろう。

その後、神原さんはこれといった親戚のないあたしの後見人となり、何くれとなく面倒を見てくれた。今では彼を、祖父が生きていたらこんな感じなのかもしれないとすら思っている。

「ト、トランプ……？」

母さんの遺品とは、なんと銀のケースに入った古びたトランプだった。

（なんでこんなものを？）

普通、母から娘への遺品といえば、もう少しロマンチックなものではないだろうか。

「はい。それは代々黎子様のお家に伝わってきたものだそうで」

神原さんは、不器用な手つきで二人分のお茶をいれるといった。

そういえば、母方の曾祖母という人はフランス人だったと聞く。外交官だった曾祖父がフランスに駐在していたときに、ふたりは恋に落ちたのだという。

けれど、もともと身体の弱かった彼女は、自らの子供と引き換えに還らぬ人となってしまった。

曾祖父は、仕方なく生まれたばかりの祖母を連れて帰国した。だから、母はおるか、祖母さえも曾祖母の顔を知らない。残された写真からすると、儂げな白い花のような美少女であるが。

おかげさまでというかなんというか、祖母も母も異国の血が混じったと思えない純日本人的な容貌だった。いくら戦争が終わったとはいえ、見るからにハーフといった外見では、当時の閉鎖的な社会を生きるのは難しかっただろうから、二人とも運がよかったといえる。

それなのに、何故か二代挟んだあたしと聖樹にはフランスの血が色濃く出てしまった。

明るい茶色の髪に、琥珀の瞳。すんなりと伸びた手足に、白い肌。たとえるなら、西洋と、東洋のごっちゃませといったふう。

初めて会った人には、たいてい『ハーフなの？』と聞かれる。最近では、いちいちクォーターと説明するのも面倒くさいので、『まあ、そんなところ』とごまかしている。

「そんなことより、警察の調査はすんだんですか？」
あたしは神原さんが入れてくれたお茶を手にとると、顔を上げた。

あたしにとって、遺品とはいえなんの役にもたないランプより、少しでも犯人の手がかりを知ることの方がはるかに重要なのだ。

「ガス爆発ということで、調査を終えるようです」
「……………」

今までの経過から、警察がそういう結論を出すだろうとわかっていた。それなのに何故だろう、世界中からそっぽを向かれたような

気分になるのは。

あたしは、ガタガタと震え、湯飲み茶碗を落としそうになるのを必死で堪えていた。

「それで聖樹は……？」

温くなったお茶をぐくりと一息に飲む。

「それも……家出ということを決着させるようです」

漸くといった態で吐き出した神原さんの声がどこか遠くに聞こえる。

彼だつてこれをあたしに伝えるのはつらいのだ。

でもあたしは、もうこんな茶番に耐えることができなかった。

ガス爆発……？

そんなことがあるもんか。まるで結界でも張ったように紫堂家だけを一瞬にして焼き尽くすなんて。しかも、彼らだつて言っていたではないか、『誰も爆発音を聞いていない』と。

彼らは怖いのだ、この事件に関わるのが。

どこからあがったかもわからない火の手。

ありえないほどの高温で、一瞬にして焼かれた家。

それより何より、存在したはずの人間・聖樹が煙のように消えうせた事実が。

聖樹と冴子の二人は紫堂家が火にまかれる寸前まで電話していて、冴子は携帯の向こう側に両親の笑い声を聞いたという。

聖樹は、家が焼かれるあの瞬間、間違いなく家にいた。冴子が帰ってくるのを待ちわびて。

それなのに何故、聖樹の遺体だけがないのか。まるで、テレポーテーション瞬間移動でもしたように。

「わかりました」

あたしは湯呑み茶碗を茶卓に戻すと、立ち上がった。

もうここには用がない。どんな手段を使おうとも両親の敵をとると決めた今、無駄に出来る時間など少しもないのだ。

「緋奈さん、待ってください！」

神原さんは、ノブにかけたあたしの手を老人とは思えない力でつかむと言った。

「まだ、お話があります」

いつにない彼の強い調子に驚いて振り返ると、そこには何かを思いつめた人間がいてあたしは、彼が自分と同じくらい心を痛めているのを知った。

「これを……」

神原さんがソファーに戻ったあたしに白い封筒を差し出した。

「いいですか、緋奈さん。」

あなたのお母様はご自分たちの死を予感しておられました。そして、それに向けてあらゆる準備をなさったのです。

ところで、緋奈さんは『ファティマの預言書』をご存知ですか？」

母さんが死ぬのを予感していた……？

ファティマの預言書……？

あたしの頭は『？』だらけになった。

「ファティマの預言書とは、一九一七年五月十三日、ポルトガルの小さな村ファティマで、聖母マリアが告げた三つの預言のことです。

第一の預言は『第一次大戦の終結』

第二の預言は『第二次大戦の時期と核兵器の出現』

そして、二〇〇〇年によくやく公開された第三の預言は『ヨハネ・パウロ二世の暗殺』というものでした。

ですが、当時の法王パウロ六世（在位1963～1978）が、読んだ途端にあまりの恐ろしさに失神したといわれる第三の預言が、ただの法王の暗殺であるわけがありません。

前法王ヨハネ・パウロ二世は二〇〇〇年に来日した際、あなたのお母様に真実の第三の預言をお話しになったのです」

そこまでを一息に話した神原さんは冷めきった緑茶をグイッと飲み干し、荒い息を整えている。

あとう、神原さん。話がでかくなってません？あたしは、両親の敵がとりたいたけなんですよ」

「ヨハネ・パウロ二世がお話しになった真実の第三の預言とは『ゆるぎの世界侵略と救世の乙女』についてでした」

救世の乙女・・・？まるでジャンヌ・ダルクみたい。

神原さんつたら年寄りのくせに案外ロマンテックなんだから。

あたしは、ニヤニヤ笑いながら尋ねた。

「それってジャンヌ・ダルクみたいなのが現れて世界を救っちゃうってことですか？」

それなのに、神原さんは、本当にマジで、

「緋奈さん。『ゆるぎ』と戦う救世の乙女とはあなたのことですよ」と、いつてよこした。

「はあ・・・？」

もしかして神原さん。インフルエンザに罹ってタミフルを飲んじやいました？」

七十過ぎても、インフルエンザになるんだとおもいながらあたしは、後見人でもある弁護士顔をまじまじと見つめた。

「タミフルも飲んでませんし、インフルエンザにも罹ってません！

緋奈さん、あなた、本気にしてませんね？」

「やっであゝ。そんなの、当たり前じゃないですかあゝ。

あたしは、どこにでもいるただの女子高生ですもん。

RPGじゃあるまいし、魔法も使えないのに世界なんか救えません！」

あのね、神原さん。今のあたしは自分のことだつて、手に余ってるのよ。『乙女』っていうところは当たってるけどさあ。なにせ彼氏いない歴年の数なんだから。

うつ、まあ、それはそれとして・・・。

でも、世界を救うなんていうのは、他のお暇な方をあたつてちようだい！

「RPG、なんですか、それ・・・？」

まあ、緋奈さんがお信じになれないのも無理はありませんが。とりあえず、黎子様からのお手紙をお読みになっただけませんか？」

神原さんはこめかみを揉み解しながら、ずいっとばかりに手紙を押し付けてきた。

彼の迫力に負けて手紙を受け取ったあたしは、前髪を止めていたピンをはずすと、ビリビリと一気に封を破った。

便箋には毎日PCばかり打っていたにしては、予想外に整った母の文字が踊っていた。

『紫堂緋奈さま。』

あんたがこの手紙を読んでいるってことは、あたしたちは死んじやったわけよね。

でもね、緋奈。親は先に死ぬもんなのよ、早いか、遅いかの違いはあってもさ。だから、くよくよしなさんな。

あたしは、大樹とあんたたちに出逢えて幸せな人生だった。少しの後悔もないわ。

でも、あんたがこれから先、厳しい戦いをしていくかと思うと、ちよっぴり心配かな。

ところでそんなあんたにとってもいいお知らせ。

そのトランプには、ステキなオプションがついてるの。しかもめちゃくちゃいい男。これからは彼と一緒に生きて行きなさい。

緋奈、最後にひとつだけ言っとくわ。

もし、あんたがイヤなら世界なんて救わなくていいのよ。あんたは、あんたの好きなように生きていきなさい。それだけが、あたしと大樹の願いなんだから。』

手紙を読み終えたあたしは、なんだか笑ってしまった。手紙の中の母さんが相変わらずだったから。

無類の面白がりに加えて、羨ましくなるくらいポジティブで。あ

たしは、そんな母さんが好きだった。かなり苦手だったけれど。
「わかりました。っていうか、まだわからないことだらけなんですけどね。」

とりあえずトランプのオプションっていうのはなんなんですか？」

あたしは、ハンカチで鼻水が落ちてくるのを防ぎながら言った。

「代々の継承者を守護する騎士だそうです。」

黎子様は『導きの騎士』といわれていましたが」

ふーん、導きの騎士ね。今度はファンタジーもどきかい。

「それで、その導きの騎士さんとやらには、どうやったら会えるんですか？」

「さあ、わたしにはわかりません、彼に会えるのは継承者^{あなた}だけです。」

ただ、あなたがそのトランプを持っている以上、そのうちひよっこり顔を出すのではないですか」

神原さんは、さもおかしそうにクスクスと笑った。

この時、神原さんが意味ありげに笑った意味を後らしみじみ知るんだけど、それどころじゃなかったあたしは、必要以上に突っ込まなかった。まあ、この時突っ込んだからって、アイツの激烈な性格が変わるわけじゃないんだけどね。

「そうですか。」

とりあえず、今日は帰ります。色々ありがとうございます」

きつちやないトランプを手に事務所を出ようとすると、妙に明る

い神原さんの声があたしの背中を追ってきた。

「緋奈さん、わたしは、あなたという犠牲がなければ救えない世界なんてぶっ壊れてしまってもいいとおもっていますよ」

「・・・・・・・・・・」

あたしは、振り返らずにそのまま頷いた。

神原さんの言葉は、とてもありがたかったけど、あたしは、自分が『救世の乙女』だなんて少しも考えていなかったのだ。

相変わらず今にも止まりそうなエレベーターから降りると、目が覚めたように明るい秋の空。昨夜の雨がスモッグを浄化し、東京の空をきれいに晴れ渡らせたのだろう。

何か進展したのかな？

神原さんは『ゆらぎ』と呼んでいた。たぶん、あの大きなブラックホールのことだろう。

今まで何の手がかりもなく、イライラさせられていたことを考えれば、これは間違いなく進歩だといえる。

でも、今のあたしには、世界なんてどうでもよかった。ただ、家族と幸せが続いただろう毎日を奪ったヤツが許せなかった。たとえ母さんが何の後悔もないといってくれたとしても。

そう考えると、復讐は死んだ人間のためでなく、残されたものが生きていくために行なうものなのかもしれない。だから、それが為ならどんなことでもしよう。

あたしは、久しぶりに雲ひとつなく晴れ渡った東京の空にこぶしを振り上げて誓ったのだった。

？

「やれ、やれ、東京に行くことやっぱ疲れるわ」

ようやくアパートに辿り着いたあたしは大きく伸びをすると、デイベックから一冊のノートを取り出した。

そのバックはもちろん、ノートさえまっさらの新品である。

あの事件は家族ばかりでなく、慣れ親しんだ全てのものを奪い取っていった、帰る場所さえも。

ここ、神原さんの借りてくれたアパートは家具家電付きで、持ち物といえば修学旅行に持っていった旅行バックひとつだったあたし

には、心底ありがたいものだった。

十畳の部屋に作りつけられたダイニングテーブルにノートを広げると、頬づえをつく。

レトルトカレーを突っ込んだ鍋があげるシュンシュンという音を聞きながら、あたしは、今までの出来事をひとつひとつ整理していた。

まあ、『ファティマの預言書』とかの話は、なんかの間違いだとしても、あたしには、『ゆらぎ』とやらから、狙われる理由があるのだろう。ヤツは、夢の中で繰り返しあたしを『継承者』と呼んだのだから。

それが母の残したトランプの『継承者』だとするなら、トランプが謎を解く鍵ということになりそうだ。あたしは、神原さんから渡されたトランプをバツクの上から触れてみた。

その時、キッチンから湯の沸きかえった鍋のゴトゴトいう大きな音が耳に入り、レトルトカレーを温めていたのを忘れていたあたしは、勢いよく立ち上がった。その拍子に膝の上のバツクが落ちてしまった。口が開いていたせいで中のものが全部ぶちまけられている。

まあ、仕方ないや、後から拾えばいいか。あたしは、とりあえずキッチンへ向かった。

「腹が減っては、戦は出来ないうてね」

冷蔵庫の中から出来合いの春雨サラダを取り出すと、レンジの上に置かれたデジタル時計がパランとめくられ、14:16分を示した。とたんお腹がグーとなる。

木製のトレイに山盛りのカレーライスと春雨サラダ、カップのミネストローネを乗せ、部屋に戻ろうとしたあたしは、しばらく自分の目を疑ってしまった。

「えっ……!?!」

さっきまで誰もいなかったはずの部屋に『キングアーサー』ばり

の騎士様が例のトランプを手に不機嫌そうに立っていたのだ。我ながらよくもトレイを取り落とさなかったものだと思う。

念のため、もう一度目をこすってみる。

どうやら夢じゃないらしい。

午後の光にきらめく白金の髪は、肩に届くほど。そして、ブルーサファイアの瞳は、切れ長で高い鼻梁へとつづく。薄い口唇が歪められているのさえ映画のワンカットのようだ。

モデル並みの身長と鍛えられた体躯まで持ち合わせた男は、ハリウッドスターも到底及ばない恐ろしい美貌の持ち主だった。例えるならギリシア神話の太陽神アポロン降臨といったふう。

「Who are you?」

あたしは、唐突に登場した美神に思い切って片言の英語で話しかけた。

「記憶力の欠如」

彼の第一声は、それだった。聞きほれてしまうほどの美声だといふのに、妙に無機質。

「日本語、しゃべれるんですか?」

「あなたは、とことん記憶力がないようですね。

その上危険予知能力も低い」

むっ、なんで不法侵入してる外人に罵倒されなきゃいけないわけ? あたしは、トレイを置くと、テーブル越しに男をにらみつけてやっただ。

それにしてもこっちがいい加減気分を害するというのに、彼は不機嫌そうに眉を寄せたままで。しかも次の言い草がさらにむかつくのよ!

「あなたは、バカですか?

見知らぬ男がいきなり現れたらまず逃げるべきではありませんか?」

「逃げる・・・?」

「そう、こんなふうにはされないうちにね」

「えっ？」

いきなり肩をつかまれて、後ろの壁に痛いくらい叩きつけられた。二本の腕が作り出す甘やかな牢獄の中、容赦なく髪をつかんだ白い指に思いのまま仰向かされる。

それなのに、男の瞳を覗き込んだ刹那、あたしは、がたがたと震えが止まらなくなってしまう。まるで、雷に怯える小さな女の子のように。

彼の瞳は、夜闇を切り裂く一条の光、罪人を断罪するための。

人の形をした稲妻は、冷たい手を頬に伸ばし、接吻くちづけという罰を課そうとした。

「あんたのしたいことをしたらいいじゃない！」

あたしは、やけっぱちになって叫んだ。

もし、自身を差し出した代償に彼という剣けんを得られるのなら、この見も知らぬ男に抱かれてやってもいい。神の雷いかずちなど恐れるものか。あたしは、どんな手段を使おうとも自分の運命に復讐すると決めたのだから。

「これ以上、無くすものなんかないんだから」

あたしは、口唇を突き出すと、大人しく瞼を閉じた。

「緋奈……」

唐突に男の腕が緩んだ。あたしは、激情という名の稲妻が鎮まったのを知った。

「導きの騎士さん、あなたの名前は？あたしは、紫堂緋奈なつかひな」

あたしは、弾んだ息を整えるとイスに座り、目を瞬かせている男の名を尋ねた。

「ラ・イール……」

「ラ・イール。『怒れるもの』という意味ね。それはあなたの苗字？」

「いいえ。あだ名です。」

本当の名は、エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール」

「ふうーん。じゃあ、エティエンヌ。あなたの知ってることを話してくれない？」

あたしは、さも当たり前のようにお願いすると、恐ろしいほどの部屋に不似合いな騎士様に向かいの席に座るように促した。

でも、エティエンヌはいつまで待っても座ろうとしない。いいかげん痺れを切らしそうになった頃、ぽつりといった。

「ラ・イールと呼んでいただけませんか？」

「いや！」

一言の元に断ってやると、エティエンヌは震えるように眉を動かした。

「あなたのお母様はわたしをラ・イールと呼んでくださいました」

「だから……？」

「ラ・イールと呼んでください！」

「いや！だつてあなた、あたしのこと緋奈って呼んだじゃない。

だから、あたしもあなたのことエティエンヌって呼ぶわ！」

するとエティエンヌは、あきらめたようにがっくり肩を落とした。

ふふっ、やった。VICTORY！対人関係はね、最初が肝心

なのよ。どうせ顔じゃ勝てないんだから、立場くらい優位にしなきゃね。

あたしは、青筋の浮いたエティエンヌの顔を見ながら、さも可笑しそうに声を立てて笑ってやったのだった。

？

「緋奈。あなた、性格が悪いといわれませんか？」

あたしがすっかり冷めてしまったミネストローネをスプーンで口に運んでいると、お行儀良く足をそろえて座っている騎士さまが聞いてきた。

「はんで、ほんなほと、ひふの？」

「しゃべるか、食べるかどっちかにしてください。まったく行儀の悪い」

「仕方ないじゃん。死ぬほどお腹が空いてたんだから。」

それに、なんであんなに他人の性格をどうこういうわけ？あんなにだけはとやかくいわれたくないんだけど」

「それはどういう意味ですか！？」

また、また一触即発の危機。

エティエンヌって『怒れるもの』という二つ名なだけあって、本当に怒りっぽいよね。今も眉間にびつちり青筋を浮かべている。

「エティエンヌ。いい加減怒るの止めなよ。」

あんなのせいで少しも話が進まないじゃん」

ようやく食べ終えた食器をキッチンのシンクに下げると、あたしは彼の眉間のシワをぐりぐりと伸ばしてやりながらいった。

「だから、エティエンヌと呼ばないでくださいと……」。

あっ……！」

また、自分が話を脱線させていることに気づいたエティエンヌが口元に手をやった。

「緋奈は、わたしが導きの騎士だと気づいていたのですね。それでは先ほどバカだといったことは撤回しましょう。」

それで、何をお聞きになりたいんですか？」

「全部……といたいところだけど、とりあえずは『ゆらぎ』について教えて」

「いいでしょう。あれらは原初の闇より出でて、人を滅びに向かわせる存在。」

緋奈、あなたは創世記を読んだことがありますか？」

エティエンヌは、蒼色のとびつきりきれいな瞳で、真正面からあたしを見つめてくる。

「旧約聖書の……？」

「ええ。創世記の冒頭、『神が光よ、あれ』と仰せられたとありま

す。そして、昼と夜が別たれた。では、光は昼、闇は夜を指すこと
になりますよね。

ですが、光を呼び、昼と夜を創っても、なおも闇は地にあふれか
えっていた。そこで神は仕方なく、残った闇を地中深く封じました。

けれど、エデンから追われた人間が地に満ちると、負の感情が積
もりはじめ、封じられた闇を呼び覚ましたのです」

「それが『ゆらぎ』？」

「はい。便宜上彼らといいますが、『ゆらぎ』はひとつの大きな意
思であり、無数に枝葉のわかれた精神生命体でもあるのです」

「へえ〜。でも、そんなのが何であたしを殺そうとするの？」

「それは、あなたがわたしの愛した少女「ジャンヌ・ラ・ピュセル」
の末裔だからです。」

ジャンヌが神から与えられた使命は、フランス一国を救うただそ
れだけのものではなく、目覚めた『ゆらぎ』を封じ、この世を平和
に導くことだったのです。

ですが、彼女はその使命を完全に果たすことができませんでした。
そして今、ジャンヌがしとめ損ねた『ゆらぎ』は、再び力をつけ、
この世を我が物にせんと動き始めたのです。

いいですか、緋奈。彼らは、生まれ出でてよりこの地球を原初の
混沌とした闇の世界に還りたいと願っているのですよ」

彼の話は、あまりにも荒唐無稽だった。エティエンヌの口から語
られるのでなければ笑い飛ばしたいほどの。でも、彼がここに存在
する、それが真実であることの証しなのだ。

「エティエンヌ。あたしにはなんの力もないわ。どんなに父さんと
母さんの敵を討ちたいと願ってもね」

あたしはテーブルに目を落とすと、血がにじむほどにこぶしを握
り締めた。

「いいえ。力はすでにあなたの中に。トランプがあなたの助け手と
なるでしょう」

そういうと、エティエンヌはトランプのふたを開け、出したカードをテーブルに大きく広げた。

そこから、白く長い指でハートのジャックを選び出す。

「これは、わたしのカードです。」

いいですか、このトランプの各スーツ《トランプのマーク》、ジャック、クイーン、キングにはそれぞれルーラー《支配者》がいて、あなたのエナジーが満ちることに新しいファクリティ《能力》を授けてくれます。

そして、すべてのエナジーが満ちれば、あなたは全部で12のファクリティを得ることができるようでしょう」

「ふーん。どんなファクリティが得られるの？」

「さあ、それは得たときのお楽しみですね。」

それより、ハートのジャックのファクリティを欲しくはありませんか？」

「く、くれるの？」

「ええ、今のままでは丸腰で敵に立ち向かうようなもの。」

お立ちなさい、緋奈」

エティエンヌは躊躇いがちに立ち上がったあたしの前にうやうやしくひざまずいた。

「巡れ、因果律！ 神の英雄、聖天使ガブリエルよ。この者をサクセサー《継承者》足らしめよ！」

刹那、虚空に振り上げた彼の左手からおびただしい光が溢れ出し、部屋中にあふれた。

エティエンヌは、あたしの手を額に押し頂くようにしてから、手のひらの中心に口づけた。すると、彼の口唇が触れた場所に小さな刻印が刻まれる。

「オリーブ……？」

「はい。オリーブは聖天使ガブリエルの標しるしです」

「ふーん。それはいいんだけどさ。あんた、いつまでキスしてんのよ？」

「イヤですか？」

上目遣いの、潤んだ瞳でみつめられて、あたしは、考えられないほどドキマギしてしまった。

「イヤって、あんた……」

エティエンヌは、とっさに引つ込めようとしたあたしの手を強引につかむと、手のひらの中心をゆっくりと舐めあげた。すると、それだけのことなのに何故だろう、指先から甘い痺れが広がっていく。

「あっ」

「感じてしまいましたか？」

絶対こいつ、あたしで遊んでる。

まったく、なんつう騎士さまだ。つくづく先が思いやられるわ。

「エティエンヌのバカ。このセクハラ親父！」

あたしが掴まれた手をぶんぶん振り払いながら罵ると、エティエンヌは、

「セクハラ親父とはなんですか！わたしは女性からそんな言葉を頂いたことはありませんよ」とこめかみをピクピクさせながらいった。

「なによ、少しばかり顔がいいからって。

大体あんた、何百年生きてるわけ？親父なんていつてもらえるだけありがたいと思いなさいよ！」

すぐさまあたしが言い返すと、エティエンヌもエティエンヌで少しも黙つちやいない。

「あなたは今までの継承者の中で最悪の礼儀知らずですね。

そんなことではこれからもずーっと恋人が出来ませんよ」

エティエンヌ、あんた、この世で一番口にしてはいけないことをいったわね。

あたしとエティエンヌは、長いことならみあった末、ふんとはかりに顔をそむけあった。

どうやらあたしたちの相性は、前途多難に最悪である。

あたしは、エティエンヌがくれたフアクリティがなんなのか確かめることも忘れてもう一度お腹が空いてくる時間まで、えんえんとやりあったのだった。

第一章 ファティマの預言書（後書き）

感想をいただけるとうれしいです

でも、生来、ヘタレのためお手柔らかにお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734x/>

聖杯を抱く騎士《シュヴァリエ》～Impossible Love～

2011年10月28日03時05分発行